

# マルチメディア時代の電子新聞

河島 健一

熊本日日新聞社

〒860 熊本市世安172

E-mail: kawa@kumanichi.co.jp

地方紙としての電子新聞のコンセプトはやはり「地域と共に生きていく」である。いくらインターネットによって世界に接続されているとしても、地域のことをメインに考えていくことが重要である。そのためには新たに読者からの情報収集システムの構築が必要となってくる。また、戸別配達システムは新聞がマスメディアであり得るためのもので、新聞社はプッシュ技術に非常に興味を示し、日本でも情報提供実験を行っている。これからはシビックジャーナリズム、パーソナライズド新聞、コミュニティー・ネットワークについて考えて行かねばならない。

[キーワード] 電子新聞 マスメディア 新聞

## Electronic Newspaper in Multimedia Age

Kenichi Kawashima

Kumamoto Nichinichi Shimbun

172, Yoyasu, Kumamoto-shi, 860, Japan

E-mail: kawa@kumanichi.co.jp

The concept in an electronic newspaper as local paper is "Live with the region still." However much the world is connected by the internet, mainly thinking about the region is important. The construction of the information collection system from the reader is newly needed for that. In delivery system, newspaper can be for mass media. The newspaper shows the interest in the push technology very much and is doing the information offer experiment. Hereafter, it will be necessary to think about the Civic journalism, the personalized newspaper, and the community network.

[keyword] electronic newspaper mass media newspaper

## 1 はじめに

1996年9月18日、米国ロサンゼルス・ドジャーズの野茂英雄投手がノーヒットノーランを達成した。「アメリカでどう受け取られているか。そのあたりが分かるといいけど」とコラム「新生面」担当者の声。しかし地方紙の場合、通信社からの送稿などを待って執筆するしかなかった。「もしかしたらインターネットで」配備されたばかりのインターネット端末でアメリカの全国紙「USAトゥデー」にアクセスしてみた。なんと一面フロントに野茂が笑っている。スポーツ面には試合の様態を伝える詳細な記事が掲載されていた。こうして朝刊一面のコラムが書かれた。インターネットが新たな取材の道を開いた熊日の第一歩であった。

## 2 機械化から電子化へ

新聞製作は戦後二つの大きな変革期を経て今日に至っている。第一の変革期は1960年台の新聞製作の機械化の時代である。漢字テレタイプ、自動モノタイプの時代である。第二の変革期は1970年代後半から80年代初めごろで、コンピューターによる編集組版システム（CTS）の時代である。この時代になると記事がデジタル化され、新聞社は新聞記事データベースの構築を開始した。熊日でも1982年にCTSを完成した。1988年には、共同通信社と共に記事連動データベースの構築を行っている。1995年には、資料写真を速やかに検索するため、写真所在データベースを構築した。いずれもテキストベースのデータベースである。このようにして新聞社は電子新聞の素材を持つようになった。

## 3 読者からみた電子新聞

新聞協会研究所が1997年5月に実施した第十二回全国新聞信頼度調査によれば、過去最低の信頼度を示した。特に「公平性」と「人権配慮」の低下が著しく、よく新聞を読んでいる40歳から50歳代での評価が低かった。また、新聞を「毎日読む」人が全体の7割程度いるものの、前回より若干減少している。特に20歳代を中心とした新聞離れが影響したものと考えられる。一方電子新聞の

利用意向では、利用したいが12.7%、まあ利用してみたいが15.0%と両方合わせても三割にも満たない。しかしながら二十歳未満で利用したい人が57.1%あり、日頃仕事やゲームでパソコンに親しんでいる世代程利用意向が高くなっている。

## 4 新聞と電子新聞

紙ベースの新聞と電子新聞を比較してみる。

表1: 新聞と電子新聞の比較

	新聞	電子新聞
メディア	マス	パーソナルメディア
一覧性	◎	○
携帯性	◎	△
操作性	◎	○
速報性	△	◎
双方向性	△	◎
情報量	△	◎
表現力	△	◎
記録性	△	◎
再利用性		
複合サービス	△	◎
ジャーナリズム	◎	○

## 5 電子新聞のコンセプト

地方紙としての電子新聞のコンセプトはやはり「地域と共に生きていく」である。いくらインターネットによって世界に接続されているとしても、地方紙としては地域のことをメインに考えていくことが重要である。マルチメディア時代になれば利用者が主役の時代であり、情報もまた利用者（読者）の求めに応じて色々と姿を変えて行かねばならない。そのためには新たな読者からの情報収集システムの構築が必要となってくる。新聞社は地方の通信社と同じ機能を持ち、シングルソース・マルチユースからマルチソース・マルチユースへ変身する必要がある。また、情報サービス形態もニュー

サービスとデータサービスという面から考えて行かねばならない。もう一つの視点としてはビジネスユースとホームユースである。これらの要素のマトリクスを上手く整理しておくことが大切であろう。

## 6 戸別配達にごだわる新聞

新聞の戸別配達はテレビでいうと電波と同じ役割である。この仕組みは新聞の価値を最大限に発揮する手段であり、読者が満足を得るためのものでもある。読者が満足しているかは配達普及率からも分かる。戸別配達システムは新聞がマスメディアであり得るためのものである。電子新聞でもパーソナルメディアまたはコミュニティーメディア（ミディメディア）の集合体としてのマスメディア化を考えて行かねばならない。最近新聞社はブッシュ技術に非常に興味を示し、日本でも実験的な情報提供を行っている

## 7 新聞はデジタル化でよくなるか

新聞社は多メディア時代への対応も急務であり、そのためにマルチソース・マルチユースへの仕組みづくりが必要となってくる。また新たな仕事、デバックという作業も追加されプログラマー的な能力も必要となってくる。

マルチソースの視点としては、インターネットは新しい情報収集への道を開くことになった。特に地方紙と海外のつながりは変わってこよう。1982年熊本県は米国モンタナ州と姉妹提携を行った。熊日としても同州の動向はかせない。同州の地方紙5紙のうち3紙にホームページがあり、今まで見えなかった同州の抱える環境、政治、教育などの諸問題、熊本への関心度、日本に関する報道の有無などの息吹が直接伝わってくる。インターネットの恩恵である。

情報公開時代に突入した現在、新聞に頼らなくても個人として情報はそこそこ集まるようになってきている。また、今まで入手できなかった情報も簡単に手に入れることができる。しかし新聞社として公開された資料におぼれると、紙面は面白くなくなる。公開された情報から、公開されない部分

を探り、より真相に迫る努力がより一層必要となってこよう。隠された部分をえぐりだす。そのためには歩くことであり、人に会うことだ。「記者は足でかせげ」は永遠の鉄則である。

新聞社は新聞・テレビ・ラジオ局を複合した機能になるかもしれない。熊日では週一回Weekly Kumanichiという英字情報を掲載している。またこの情報を基にしたラジオ番組の提供も行っている。インターネット上で提供している熊日のホームページには英字情報とその記事、リアルオーディオを利用したラジオ放送を組み込んだコンテンツの提供を行っている。

このように新聞のデジタル化により、情報活動は広がり、公共的なジャーナリズム活動に寄与することになる。新聞はデジタル化でよくなる—これが答えである。

## 8 これからの電子新聞

新聞は「客観主義」「公正中立」「不偏不党」にこだわり各社の紙面が同質化している、読者の方がはるかに多様な価値観を持っている。また、インターネットの普及で読者は一次情報の入手も可能となってきている。こんな現状を踏まえると「分離」の視点から「つながり」の視点をもう少し重視していくことを考えて行かねばならない。「分離」とは自由、独立、客観主義、公正中立、不偏不党の立場であり、「つながり」とは地域住民との密接な相互協力関係、地域の問題とその解決への積極的な関与、新聞社としての自発的な提言など地域とのつながりを重視する立場である。これをシビックジャーナリズムと呼んでいる。

### 8.1 シビックジャーナリズム

シビックジャーナリズムとは特に難しいことではない。熊日も1974年元旦号の社告に「地域主義」を提唱、地域に密着した紙面づくり、具体的には地元紙としての現場主義、生活主義、日常主義を貫き、読者一人一人との対話による紙面参加を強力に推進することを明らかにしている。

電子新聞の機能として双方向性の強化は著しいものがある。そのため参加意識の高い共同体を形成、有識者の意見の集約、ネットワーク利用に

よるパネルディスカッション、電子フォーラム（電子ワークショップ）の利用、世論調査の充実、アンケート調査による投票行為の促進などにより地域住民とのコミュニケーションを充実させ、地域住民の関心の高い争点を集中的に報道していくものである。

熊日が現在行っているのは、電話による「こちら編集局」、手紙による「読者のひろば」、パソコン通信による「くまさんネットから」などである。インターネットでは「ふれあい掲示板」を運営している。熊日55周年企画としては阿蘇の草原を考える「くまもと楽座」のキャンペーンが進んでいる。

## 8.2 パーソナライズド新聞

デジタル化した新聞では情報量の制約から開放される。そのため読者は情報の氾濫で混乱を招きかねない。そこで読者が必要とする情報だけを提供することが望まれる。熊日では熊本大学や熊本県工業技術センターと共同でフィルタリング技術を利用した「あなたの紙面」を試作・研究中である。まだ読者のニーズ情報から選別しているが、本当に必要とする情報を的確に提供できる段階ではなく「あなたの紙面」と呼んでいる。本格的になれば「私の紙面」ということになろう。しかしながら「私の紙面」だけの購読では共通話題がなくなり、ぎくしゃくした人間関係になってしまうのではなからうか。そのため共有情報としての総合情報と「私の紙面」の仕組みが必要である。

## 8.3 コミュニティー・ネットワーク

シビックジャーナリズムやパーソナライズド新聞をサイバースペースで提供するためには会員制にする必要がある。このためコミュニティー・ネットワークの構築が必要となってくる。インターネットプロバイダ業によりネットワーク化する、パソコン通信業のようにフォーラムを形成してネットワーク化する、コンテンツに対してネットワーク化する方法が考えられる。またこれらの組み合わせの方法もある。いずれにしても新聞社はコミュニティー・ネットワークの構築を急がねばならない。

## 9 おわりに

本稿においては電子新聞の広告については言及しなかったが、マルチメディア時代の電子新聞を考える場合、不可欠な要素である。特に地方紙にとってまだ答えが見つかっていない。当面コミュニティーを形成しそこでシビック・ジャーナリズムを展開し、パーソナルまたはミデイメディアを集合体とした電子マスメディアを模索することになりそうだ。

## 参考文献

- [1] 河島健一、河北隆生、中嶋卓雄：電子新聞の開発、第10回熊本県産学官技術交流会、pp. 125-126 (1996)
- [2] 日本新聞協会研究所、第十二回全国新聞信頼度調査、新聞研究、No. 554、pp. 26-45 (1997)
- [3] 水野剛也：読者との対話通して問題解決目指す、新聞研究、No. 549、pp. 52-55 (1997)
- [4] 桂敬一：デジタル統合をジャーナリズムに生かす、新聞研究、No. 548、pp. 45-47 (1997)
- [5] 井芹道一：変わる地方紙と海外のつながり、新聞研究、No. 546、pp. 79-81 (1997)
- [6] 熊本日日新聞社、熊日四十年史 (1982)